

= 曾爾の地名 =

1 はじめに

地名は、特定地域を明確に表すための絶対的な固有名詞です。曾爾村におけるさまざまな地名を伝説や語り草(部)を通して由来や歴史を感じてはどうでしょうか？

「温故知新」(故きを温ねて新しきを知る)という言葉があるように、地名という無形の考古学的遺産を少年自然の家の利用者の皆さんが、それぞれの地域の地名を認識し、身近な物やそこに住む人々の大切さを感じ、ひとひとかがどうかかわっていくかを学習してほしいと思います。

2 曾爾の由来

= 曾 爾 = (そに)

曾爾・(そに)と読みます。曾根(ソネ)と同義語です。

(ソ)は石・(ネ)は丘地(陵)のことです。従って、「ソニ」は石礫の多い土地を意味します。見るからに岩場・岩山の多い村であり命名の意がくみとめることができます。文字が変わっていくことにふれてみるとよくわかります。

古事記(712年)では「宇陀の蘇邇(そに)」

日本書紀(720年)では「宇陀素珥(そじ)山」

光明寺文書(934年)では「曾児(そじ)」

平安中期(?)に「曾爾」と移り変わり現在に至っています。

= 塗部の里 = (ぬるべのさと)

曾爾は「塗部の郷(ぬるべのさと)」と呼ばれています。昔、日本武尊(やまとたけるのみこと)が曾爾を訪れ、狩りの途中、屋の先に漆(うるし)の樹液を塗り弓を引くと獲物がたくさんとることができました。また、手についた黒い樹液を品物に塗ると光沢がでて美しく染まった。そこでこの地に「塗部の造(ぬるべのみやつこ)」を置き、日本で最初の「漆塗り」技術の基礎を造ったとされています。これが命名の由来です。

3 お亀池にまつわる地名について(伝説から)

少年自然の家のある大字名を太良路(たろじ)といいます。この太良路の東に自然の家があり三重県との境に亀山があります。亀の形に似ているということでこの名が付けられました。この亀山のふもとに池があります。これをお亀池と呼んでいます。

むかしむかし、お亀という女性が伊勢の国の太良村から太良路村へお嫁にきました。年齢は、18歳で本当に美しい女性でありました。お亀は毎朝、家の裏にある井戸で水鏡を見て化粧していました。この井戸水は深く水は亀山の池からきていました。しばらくするとお亀は、毎晩どこかへ出ていき朝になってから帰ってくるようになりました。そして裏口に泥のついた草履(ぞうり)がぬいでありました。その草履を見て夫は、お亀に聞くと「子供が生まれますように」とお祈りにいっているのだとこたえました。そのかいあって、夫婦の間に子供が生まれました。お亀は、「私の仕事は終わりました。おひまをください」と実家へ帰りました。子どもは、お腹をへらすと大きな声で泣きます。また、夜泣きをします。夫は、その子どもをだかえ、乳を飲ませてもらうため、お亀の実家の方へ出かけました。「お亀よ、お亀よ」とよびながら池のあたりまできますとお亀が迎えにきてくれました。そして乳を子どもに飲ませて「もう明日からは来ないでください」と夫に伝え実家に帰って行きました。やはり次の日、子どもが夜泣きをしますのでまた子どもを連れて池のあたりまで行くとお亀が池の中から現れたのでありました。「もう来ないでください」といったでしょう「どうしてくるのですか？」と怒りながら大蛇に化けて大口を開けておそいかかって来るではありませんか。夫は

子どもをだきかかえ一目さんに逃げました。その場所を字大口 (おおぐち)と呼んでいます。大蛇は、立つような姿勢で追ってきました。そのことを「タテ」とか「タツ」ということから、その地を立堀 (たてほり)とよんでいます。また、大蛇が追うのに疲れて休んだということで、字幣足 (ひょうそく)といい、そこで水を飲んだということで字水呑 (みずのみ)とよみます。

命からがら逃げ帰った夫は、その後重い病気にかかって死んでしまいました。お亀池の主と呼ばれていた大蛇も山火事になったときに焼け死んだといわれています。もともとこの池は太良路池と呼ばれていましたが、このお亀の事件があってから「お亀池」といわれるようになったと聞いています。

4 伝説の人物 井上喜曾 (いのうえ きそ)の「おろち」退治にまつわる地名

井上喜曾」という人が、「おろち」退治に行くことになりました。この時、笛を吹いて呼び寄せたということから、字笛塚 (ふえづか)という地名があります。「おろち」退治にいきましたが、途中追われて逃げる時、腰にさした鉈 (なた)を川の淵 (ふち)におとしたところということから字ナタ淵 (なたぶち)と呼ばれ、逃げのびた井上喜曾」が、後を振り返りながらおろちの様子を岩のかげからのぞき見たところということから、字のぞき岩 (のぞきいわ)という地名となりました。今も字除き石 (のぞきいし)という地名があります。また、井上喜曾」が最後の力を振りしぼり「おろち」を見事に退治したとき、「おろち」が飛んでいく激しい風をさけるため、両足を踏ん張り 反対側に飛んだ。その時足形が岩に残ったとされていることにより、字足形 (あしがた)とよばれています。井上喜曾」の弓矢に討たれた大蛇が、怒って長く縦に走ったということから、字長走り(ながばしり)といい、その時にできたとされる「滝」があります。その滝を「長走り」の滝 (ながばしりたき)」と呼んでいます。

5 おわりに

地名を調べるにあたり、古老の話を聞いたり文章を読んだりすると土地の伝説や語り草が、現在の生活環境と大きくかけ離れすぎて、風情や情緒があまり感じられないことがたくさんあります。

地名は伝説や物の形、状況により命名されたものが多いといわれています。

先人の知恵に学び、地域の良さや伝統文化の継承がいかに大切であるかが身にしみてわかったように思います。

単に地名といえども、もし固有名詞がなければどんな小さなことでも説明するのに大変苦労するでしょう。地名もさることながら、自分の姓や名前についての由来なども考えてみてはどうですか？

皆さんも時間があれば「自分さがし」や「地域さがし」をやってみてはいかがでしょうか？

発行年月日 平成 14年 3月

執筆者 木治正人

参考文献

・ぬるべの昔ばなし(平成 5年) 岩城千晴 著

・曾爾村史(昭和 4年)